



書評

[評者]

小松 康宏

板橋中央総合病院副院長/  
群馬大学名誉教授

# Dr. 長澤印 輸液・水電解質ドリル

長澤 将 著

●B5 頁192 2023年10月  
定価：4,620円(本体4,200円+税10%)  
[ISBN978-4-260-05296-2] 医学書院刊



本書を手に取り読み始めると、数ページごとに「うわー」、「うわー」と感嘆してしまう。輸液・水電解質の基本と臨床の実際とを、著者の深い知識と経験の下に、それを気付かせないようなさりとした文体で、読者にとってわかりやすいように書かれている。学生や研修医は気軽に読めるだろうし、指導医クラスは、行間に埋もれている腎生理学に気付くとともに、自らの経験を思い返して納得することであろう。

私は学生時代から輸液・水電解質に関心をもちつづけてきた。臨床実習で提出したレポートは「麻酔と電解質異常」で、卒後、医師になってからも輸液・水電解質の勉強は楽しかった。いくつかの解説書も出版させていただいたが、今回、長澤将先生の書かれた本書を読み、もう私の出番はないなと感じた次第である。

輸液療法は最も頻回に指示される薬物療法であり、輸液関連インシデントは医療安全上の課題でもある。血清電解質濃度異常は最も頻回に遭遇する検査値異常であるが、条件反射的に「直ちに是正すべき」と判断することは、不要な検査や治療、業務負荷、さらには医原性の新たな問題を生じかねない。Hb低下に対し、条件反射的に輸血を指示する医師はいない。同様に、電解質濃度の逸脱に対し、やみくもに検査や治療を指示することは賢明ではない。個々の患者の精神・社会・医学要因を含めた全体像、さらに生理学、各種検査法の限界を理解した

うえで初めて、適切な医療・ケアが提供できる。医療の目的が、「医学的異常の是正」から、「患者にとっての価値の最大化」に変わっている今日、輸液療法や電解質管理も同じ視点が求められる。本書の1章は、このような医学医療の大原則を確認するところからはじまっている。

とはいっても、迅速な診断と治療が必要な電解質異常も少なくはない。2章以降は読者に対し、どのように考え、診断と治療を進めるかについて、症例に沿って読者を誘う。本書を読んで、輸液・水電解質の基本を身につけた若手諸君は、ベッドサイドで電解質異常を見た際に、本書を読み直し、基本知識の理解を深めてほしい。さらには、1人でも多くの若手が、本書に示された参考文献、さらには腎生理学の教科書をひもとき、腎生理学や輸液療法の実践、研究を発展させていただきたいと思う。著者が薦めている『Clinical Physiology of Acid-Base and Electrolyte Disorders』は、UpToDate®を創設したBurton Roseの著書であり、私は研修医時代に購入した第3版を今も大切に持っている。

「日和らずRA系阻害薬を継続できるか?」、「最近アツいぞ低Na血症界限」、「何かと話題の皮膚のNa」、「フロセミドの使い方」などのコラムは、専門医にとっても興味深い。専門領域にかかわらず、すべての研修医と専門医にぜひ手に取ってほしい書籍である。